

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 34

関西大学博物館彙報
平成9年3月30日発行

[SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



馬形埴輪（伝茨城県出土）

目 次

高松塚古墳壁画の難解五題	2
占領下日本の輸出商標－3－	4
温州開元寺調査記	6
輪島塗「屠蘇器」資料について	8
内藤湖南の瀋陽訪書調査	10
常設展示の見どころ(1)	13
平成9年度考古学入門講座他	16

関西大学博物館

〒564 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel 06-368-1171 (直通)

FAX 06-388-9928

高松塚古墳壁画の難解五題

網 干 善 教

歳月のたつのは早いもの、昭和47年（1972）3月21日に、奈良県高市郡明日香村平田所在の高松塚古墳で、星辰・日月・四神・人物群像の壁画を発掘してから、今年（1997年）は25年になる。四分の一世紀である。

高松塚古墳の壁画は発掘調査の当初から大きな関心をもたれ、考古学のみならず、文献史学、民俗学、美術史学、天文学その他関連諸学問領域から多くの意見が発表された。また、中学校や高等学校で使用される日本史の教科書の口絵にも掲載され、現地では史跡公園としての整備もすすみ、現在も多くの見学者が来訪される。

高松塚古墳は、昭和47年6月17日、史跡に指定、昭和48年4月23日、特別史跡に、昭和49年4月17日、壁画を国宝に、出土品は重要文化財に指定された。

ところで、発掘調査の過程では一見してすぐその意味が判明する事象もあれば、ある程度の時間を置いて、調べたり、分析したりして、漸く判明することもある。10年とか20年の時間と手数をかけることによって見通のつくこともある。また、いつも心にかけているが、どうしても解釈の糸口をみつけないことのできない課題もある。高松塚古墳も場合も、一見して理解のできたものもあれば、星辰の様相や東西両壁の人物像の位置（床面からの高さ）の問題、海獣葡萄鏡の同型鏡、遺体の葬位などは、資料を検討するなかで大体のことは理解ができた。ところが、最初から話題となった正確な築造時期（年、月）や被葬者の想定などは、種々の意見が述べられているが、これらの問題は確定できそうにない。ことによっては永遠の謎となる可能性もある。

そこで、発掘調査当初から注意して観察し、問題意識をもってみている壁画についても、甚だ難解な課題が多くある。そのうちの若干を挙げて将来に備えたい。

その1つは、天井の星辰図である。星辰の思想的背景は恐らく中国古代の分野説によるものであるとは推定できるが、現在中国にみられる『新儀象法要』や『蘇州南末淳祐天文図』など

の星辰図と対比すると、何かの星辰図を手本としていることは間違いない。では、その粉本となったものは一体何であるかということを知りたいが、これは至難なことかも知れない。

2つ目は、高松塚古墳の石槨内の東西両壁に男、女像各4人が群像形式で描かれていた。それはそれでよいが、何故、4人なのか、4人の群像は何を意味しているのか。すなわち3人以下ではいけないのか、5人以上ではいけないのかということである。有名な唐の永泰公主墓の壁画には多数の女子像が描かれているし、高句麗の双楹塚や徳興里古墳など壁画でも、多くの人物が描かれている。それに対して、高松塚古墳の東西両壁の男女群像は共に4人というのは何か特別な意味があるのだろうか。単に適当に4人描いたとは考え難い。何かの理由があるだろう。それをどう考えるかという課題である。先般、朝鮮民主主義人民共和国の開城市郊外にある高麗第31代恭愍王陵の側壁面に各面に4人の人物像が描かれており、そのレプリカが開城博物館で作製しているという情報を得て、開城に赴き実見することができた。確かに4人の人物像が描かれてはいるが高松塚古墳のものとは異なり、これをもって高松塚の問題を追究することは困難であると思った。

25年間、なぜ4人なのかの手懸をつかもうと思って考えてきたが、今のところ確かな解答は得てない。「八佾」や8人8列に並ぶ「唐乾陵会葬人像」をはじめ、中尾山古墳で考えた八角形ことを想定してみたこともあるが、今なお解答を得ていない。

3つ目に東西両壁の女子群像図を見てみよう。裳に注目してみると、両者共に、手前側に描かれている2人は縞文様のカラフルな裳を着用しているのに対して、遠方側の2人は共に単色と思われる裳をつけている。これはどういう違いなのか。身分差なのか、職種差なのか、あるいは別なことを表現しているのかという問題である。特に問題とする必要はないという意見もあるかも知れないが、意識的に描き分けられてい

るということであれば、考えてみることも課題であろう。ただ、難題の一つであるから、将来どのように展開したらよいのかという方向性が定まらない。同様なことは上衣についてもいえる。色別が何を表現しているのかということにも疑問が生じ、さらに男子像についての同様な問題にも発展するかも知れない。

次に、4つ目に持ち物である。男子像の8人共に各々持ち物が描かれている。そのうち東壁の南端と南より3番目、西壁の南より3番目の人物は袋状のものをかける。また、東壁の蓋をもつ人物、北端の茶色の袋を担うもの、西壁の南から2番目のやや長い茶色の袋を担うもの、そして西壁の胡床、向って右端の杖状のものをもつ人物、同様に女子群像も各々2人宛に持物が描かれている。この持物の種類は何を表わしているのだろうかということである。壁画発見当時、『貞観儀式』や『文安御即位調度図』などと類似すると指摘されたことがあったが、これには反論もあった。また、永泰公主墓や中国の壁画古墳の出行図との共通性も指摘されたが、これも問題にならなかった。高松塚古墳壁画、特に人物論を述べる場合は、この点もふくめて考えるべきであろうと思う。ただ、これは難解かも知れない。

5つ目の課題を挙げておこう。高松塚古墳の東壁中央に青龍図が描かれている。青龍は四神のうち、東方の星宿から生れた図像であるが、その青龍の頸に頸輪のような文様が描かれている。この頸に巻く带状のもののなかにX状の文様がある。

ところで、奈良西の京薬師寺本尊台座の東面に表現されている青龍の頸の部分を見ると高松塚古墳のものと同じ带状のものがあり、そこにX印の文様が刻まれている。集安の四神図の青龍図にも高松塚古墳の青龍図と同じものが描かれている。また、江西大墓の青龍図をみると同じ位置に環状の頸飾を描いている。そして高松塚古墳の青龍図と同じ頸飾が青龍図ではなくて、朱雀図の頸に描かれたものもある。さらに、玄武図の蛇の頸にも同様のものが描かれた例が、西安東郊高樓村で1995年発掘された高元珪(756年歿)の墓室壁画や1952年西安郊外の緯十路で発掘された蘇思昂(745歿)の墓室北壁壁画など朱雀図や玄武図に多くの事例がある。



高松塚古墳 青龍図



薬師寺本尊台座 青龍図



高句麗江西大墓 青龍図

四神の思想といい、こうした頸部の表現の共通性をみると、表現の偶然の一致ではなく、何らかの共通の意味があり、それが彼我の壁画にみられるものと思われる。それは一体何を意味しているのだろうかという疑問をもつ。

所詮、考古学研究は発掘調査をすれば何でも判明するというものではなく、場合によっては難解の課題が生じてくるものである。それがまた研究の深化につながるものであろうと思う。

占領下日本の輸出商標— 3 — —インド・パキスタン向け O. E. M 輸出商標—

山口 卓也

1 占領下日本の繊維産業は、国内の生産や原材料輸入・製品輸出の両方を、GHQ の指揮・指導のもとにおかれていた。占領当初の繊維産業は、国内民生向けの供給は二の次とされ、むしろ製品のいわば「飢餓輸出」によって外貨獲得が意図されたものであった。

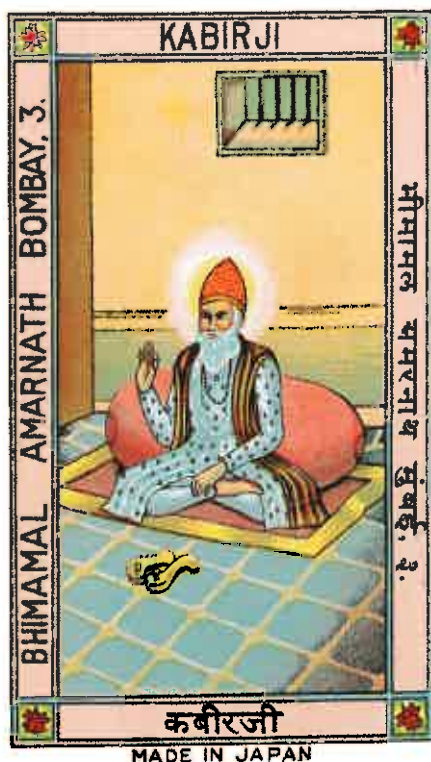
斎藤洋氏所蔵の占領下日本の輸出商標は、その内容からほぼ占領期ははじめから終わりまでの商標を含んでいると考えられるが、これらを手細に観察すると、GHQ の施策の変化が読みとれて興味深い。占領期の輸出繊維製品の初期商標には日本の生産会社や商社の名はなく、生産国表記が「OCCUPIED JAPAN」となっているものが認められ、GHQ の管理が厳しかったことを示している。また、輸出相手先ブランド名を明示した形の「O. E. M 商標」は、初期を除いたほぼ全期間を通して存在したようである。後半には日本の生産会社や貿易商社名を明記した商標が認められ、緩やかな管理貿易への変化を示している。

今回は、インド・パキスタン向けの O. E. M 輸出商標を紹介したい。インド・パキスタンへは、木綿布などがサリー用などとして輸出されたりしく、いずれも反物の端に付けられた商標である。

2 1 葉のインド向け商標、3 葉のパキスタン向け商標の、合計 4 葉を示す。

第 1 図は、インド向け商標で、帽子を被り光背をもったヒンドゥー教聖者が結跏趺座し、右手で印を結んでいる図を中央に配している。手前には足指型の木製サンダルが置かれている。上に「KABIRJI」と英語で、下にヒンズー語の O. E. M 先会社名が、左に「BHIMAMAL AMARNATH BOMBAY, 3.」と英語で、右にヒンズー語の相手先住所が記されており、ボンベイの会社向けであることが判明する。枠外下に「MADE IN JAPAN」とある。表面にはニス塗布はされていない。

第 2 図は、パキスタン向け商標で、三羽の孔雀が枝に留まっている図を中央に配している。



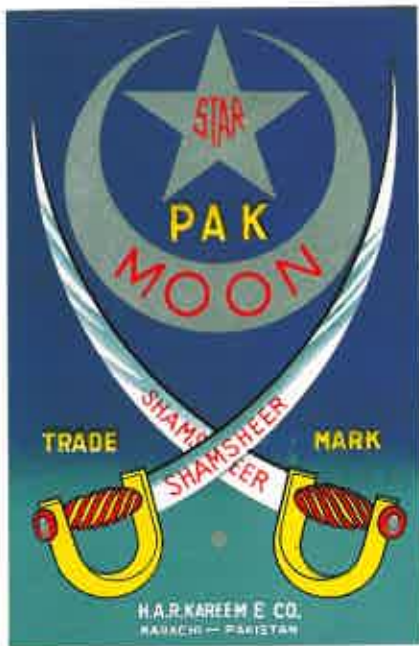
第 1 図

雀が枝に留まっている図を中央に配している。記載はすべて英語でなされており、上には「YACOOB AHMED Bros (PAKISTAN) Ltd.」とパキスタンの会社名が、下には「KARACHI」



第 2 図

と港湾都市カラチの名前があり、さらに右には「BUNDER ROAD」と通りの名前、左には「HEMANI MANSION」とビル名が住所として記されている。生産国表記はない。孔雀の羽の筋や外枠の一部には、金粉で彩色した部分がある。表面全面にニス塗布して光沢を与える処理を施している。



第3図

第3図は、イスラムの象徴である月と星、2本の交差する剣を図した商標である。月と星の間にはパキスタンの略記「PAK」とある。剣身には、O.E.Mブランド名と思われる「SHAMSHEER」の文字があり、下には「H. A. R. KAREEM & CO.」、「KARACHI—PAKISTAN」とパキスタンのカラチの相手先会社名が表記されている。

第4図には、やはりイスラムの象徴である月と星を表し、中にイスラム教寺院を描いた商標である。上にはアラビア文字が表されている。下には「Z. H. ANSARI & Co.」と相手先会社名が、「KARACHI — DACCA — CHITTAGONG.」という都市名とともに示されている。カラチは西パキスタンの、ダッカとチッタゴンとは当時の東パキスタンの都市であり、パキスタンの会社の商標であったことが知られる。



第4図

3 インドとパキスタンは、インドがヒンズー教徒多数の、パキスタンがイスラム教徒多数の国家として1947年8月にイギリスから独立している。これらインド・パキスタン向け O. E. M 商標は、日本の敗戦後繊維製品の GHQ による管理下貿易が始まってから講和条約調印前後までのものであるが、とくに両国の独立後のものであることになる。

宗教を理由として両国が強引に分離したことにより、パキスタンは東西に飛び地をもって独立せねばならなかった。カラチ・ダッカ・チッタゴンの三都市を記した商標は、当時のパキスタンの状況の一端を示しているといえようか。さらに東パキスタンは後にバングラデッシュとして1974年9月にパキスタンから分離独立することになる。

インド向けの商標にはヒンズー教聖者が、パキスタン向けには月に星のイスラム教シンボルやモスクが描かれていることは、商標の作成に際して宗教的社会背景に相当の注意が払われていたことを示していて興味深い。これら商標の版下作成・印刷は日本国内で行われたのであるが、そのデザイン指示を誰が行ったかは今のところ不明である。

＜温州開元寺調査記＞

藤 善 眞 澄

日中関係史の研究に手を染めていると、中国の沿海地域、ことに遣唐使船の発着した江南から浙江省一帯にかけては、やはり気になるエリアである。これまで上海から乍浦、杭州、紹興、寧波と海沿いに数回にわたり訪れている。また南の福建省の厦門や福州、泉州などへは、およそ二十年近く前、団長に東大教授で今はなき三上次男先生をいただき、本学の大庭脩教授を秘書長とする一行七名の中に加わり、杭州から名だたる峻峻の武夷山系を越えたことがある。ところが寧波―福州の間、つまり浙江東南部と福建東北部のあたりは、杭州や寧波などに優るとも劣らぬ日中関係史を彩った舞台でありながら、いくら食指を動かしても手のとどかない、いわば垂涎の地域であった。三門あり臨海あり、黄岩そして温州・瑞安がひかえている。最近では解放政策のお蔭で温州みかんの古木が温州の内陸部より紹介されるまでになった。この機会を一日千秋の思いで待ち焦がれていたのである。

幸いにも平成七年度の文部省国際学術研究「浙江と日本」の恩恵に浴し、その調査地域を寧波から温州までに絞り込み、研究分担者の宮下三郎社会学部教授、内田慶市・松浦章両文学部教授の四名で平成七年十月九日、上海へ飛んだ。翌日、蘆湖碼頭で海馬（快速艇）に乗り込み、約二時間半ほどで鎮海に到着。列車と比べてあまりの速さと、かねて縦断してみたいと念願していた杭州湾の渺々たる景觀に感嘆しきりの船旅とあいなった。

鎮海より寧波・天台山・臨海・黄岩・温嶺など、とりわけ『諸蕃志』の著者、南宋の趙汝适の墓誌が発見された臨海については詳しく紹介したいのであるが、紙数の関係もあるので一切を他の機会にゆずり、今回の調査では最も南に位置する温州の開元寺に限って報告しておきたい。

十月十三日早朝に天台山をマイクロバスで出発、午後八時過ぎに温州の甌昌飯店に到着した。翌朝、温州市の東南部にある南白象鎮に向い、白象寺塔の遺址を調査する。つい最近、崩壊し

た塔の基壇から現存最古の部類とみられる木版の陀羅尼経が発見されたニュースに接していたからである。白象寺塔は温瑞塘河に面した小高い場所に、再建のメドもたたず基台をさらしたまま放置されていた。ちなみに『温州導游手冊』（一九九四年）には七重の見事な「南白象鎮古塔」の偉容が掲載されている。

午後からは温州港をへて温州の北を流れる甌江に浮かぶ江心嶼を見学する。ここに建つ江心寺は唐の咸通年間（八六〇―七三三）の創建に始まり、五代呉越国の忠懿王錢弘俶が師と仰いだ名僧德韶が住した寺である。彼は天台山国清寺の普寂に相談をもちかけられ、忠懿王に中国では唐末の兵乱や廃佛のため散佚して残っていない天台教籍を、高麗と日本から購買して欲しいと頼んだ。王は德韶の要請を受けると、黄金五百両を託して村上天皇に天台教籍の五百余巻を書写してくれるよう求め、これを受けて天歷七年（九五三）に延曆寺僧の日延が遣唐法門使となって送りどけることになる。まことに日中文化交流にも大きな足跡を残した人物なのである。江心寺の東には南宋の烈士文天祥を祭る祠もあり、彼の「北より帰って江心寺に宿る」の詩碑が建てられていた。

さて翌十五日、いよいよ温州開元寺の探索にとりかかる。この寺は東晋の太寧五年（咸和二年、三二七）李整という者が自宅を喜捨した崇安寺がルーツだと伝えられる。『温州府志』には瑞安門と望江門街の東辺にあり、南には文廟（孔子廟）があったと書いてあるが地名も街路もすっかり様変わりし、あらかじめ旅行社を通じて依頼しておいた調査も無駄であった。やむなく目標となる積谷山を訪ねることにする。南朝宋の文人として有名な謝靈運が永嘉（温州の旧名）太守に左遷された時、この小山を逍遙しながら詩を賦したといわれ、山頂には留雲亭があった。現在は中山公園の一部となっており、公園路をはさんで北には華蓋山が連なり、温州市街の東に緑色の彩りをそえている。

ここまで来れば開元寺址は近いはず、そう見

当をつけて公園路を西に進みながら尋ね歩く。けれども知らぬ存ぜぬの人ばかりで一向に埒があかない。昔を知るお年寄を探すうち、ふと高い土壁に仕切られた一郭を見つけた。その傍の小巷を入り聴きとりを開始して間もなく、とある家で近隣の事情に詳しい施永森という七九才の老翁を紹介された。彼の言によると高壁が旧開元寺境内の名残りで、一九五〇年代初めまでは寺院があり、その後、浙南日報、温州日報などの所在地となったという。一部を転用したという温州展覽館に入り内部を勝手に覗いて驚いた。表からは分からないが屋根や柱が寺院の構えそのままである。明らかに旧開元寺の遺構を転用したもの。施氏の説が正しいことを証拠だてている。『温州府志』に「旧志に云う、府城内の修礼坊に在り」とみえる修礼坊の地でもある。

これほどまで開元寺にこだわる理由は、入唐僧の智証大師円珍ゆかりの寺だからである。

円珍は仁壽三年（八五三）、陰暦の七月十六日、弟子の豊智と閑静に通訳の丁満ら俗人五名を加えた一行八名で、唐の商人欽良暉達の唐舶に乗り込み、博多を出帆した。そして長崎の五島は奈留島に寄港。八月九日に出港し、十五日には福州の連江県に到着している。「合船て喜び躍り、死して蘇るを得たるが如し」（「円珍伝」）とあるが、ここから海ぞいに迂回して福州に向い、長官のはからいによって福州開元寺に宿泊が許された。それから一箇月余り、九月二十日に福州を発ち、再び海路をとり海口鎮、江口鎮をへて安固県、現在の瑞安に達し、十月末に温州、当時の永嘉郡に入ることができたのである。

長官の裴開は一行を快く迎え、開元寺に宿泊させたが、その寺こそ先に突きとめた公園路に面する区域というわけである。円珍らの滞在は一週間にすぎなかったけれども、臨壇大徳の宗本をはじめ多くの知人を得た上に、彼らから四十七部にのぼる經疏類を寄贈されるなど、忘れることの出来ない寺の一つとなった。帰国後も交渉を持ちつづけた座主徳円と親しくなったのも貴重な財産となった。

近年の寺域でさえ偲ぶすがとてない今となつては、円珍当時の規模など想像もつかないが、その一隅とおぼしい場所に佇み東の華蓋山、積谷山を望見しながら、少くとも両山の眺めだけ

は昔と変わらないのではなからうかと、想いを一一四〇年余りに馳せることであった。



旧温州開元寺の内部遺構
現温州展覽館



旧温州開元寺の外壁



温州景德寺遺址
国共合作の行われた場所でもある。

輪島塗「屠蘇器」資料について

角 田 芳 昭

本学博物館が開館し3ヶ年が経過した。展示資料は考古資料が中心で、その他に文書資料、民俗資料、美術工芸資料を展示公開している。美術工芸資料は所蔵品が少なく、営意収集に努力しており、平成8年度も輪島塗の「屠蘇器」を購入したのでここに紹介したい。

漆器の代表的な生産地として会津塗、越前漆器、香川漆器、金沢漆器、鎌倉彫、川連漆器、紀州漆器、木曾漆器、京漆器、高岡漆器、津軽塗、飛騨春慶、村上木彫堆朱、山中漆器、若狭塗、輪島塗等がある。これらの生産地はその地域に即した漆器を制作販売していたが近代になり全国的に販路が広がり世に知られるようになった。

わが国において漆器が使用され始めたのは既に縄文時代前期(約8,000年前)の頃で、福井県三方郡三方町の鳥浜貝塚より櫛、盆状容器、漆塗土器等が出土しており、中期には埼玉県大宮

市の寿能遺跡から飾弓、鉢、杓子、椀、壺、皿、櫛など約100点が出土し話題となった。また晩期(約2300年前)の遺跡として著名な青森県八戸市是川遺跡からも弓、漆塗木製品が多量に発見されている。そして弥生時代の唐古遺跡、安満遺跡、伊場遺跡などからも発見されている。また古墳時代の遺跡の中より黄金塚古墳、大塚山古墳、七回鏡塚古墳などから武器、武具などに漆芸の技術が施されている。終末期古墳の牽牛子塚古墳よりは夾紵棺の破片が多量に発見されている。続いて飛鳥時代の代表作では最古の伝世品である「玉虫厨子」がある。天平19年(749)に勸進された『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』に「宮殿像武具」とあるうち、押出千仏像を納めたものにあたるとされている。全体に漆が塗られ、宮殿部には天部像、菩提像、靈鷲山浄土図、そして須弥座には飛天や比丘による供養図、須弥山図など朱、黄、緑の漆絵によって描かれ



輪島塗「屠蘇器」(三ッ揃雪才型溜呂色紅白梅)

ている。また正倉院に保存されている漆器などもあり、特に螺鈿など華やかなものもある。また近年平城宮跡より多数の黒漆で塗った皿、杯、椀などが出土している。

さて「輪島塗」であるが石川県輪島市で産する漆器である。珪藻土を主成分とする輪島地方特有の地粉下地を用いた堅牢な工法と、塗師屋が木地師、加飾工その他の工人を統括し、問屋を兼ねて直接販売に携わる独特の機構とによって、全国的に販路を拡張し、日本有数の漆器生産地として知られている。

現在も良質の漆使用と伝統的工法を原則とし、日常漆器をはじめ、茶器、調度類、懐石道具その他の高級漆器を生産し、加飾には沈金と蒔絵が主に行なわれ、特に沈金の発達は他の産地の追従を許さない。

輪島塗の起源については諸説がある。(1)応永年間(1394~1428)輪島の福蔵なる者が紀州根来に行き技術を得て伝えた。(2)根来寺の僧侶が応永年間あるいは天正年間(1573~1592)に能登の重蓮寺に来て漆器をつくった。(3)鳳至郡柳田村合鹿に産する合鹿椀と関係があるなどの説がある。輪島塗らしい基礎ができたのは、江戸時代初期寛文年間(1661~73)に地の粉を発見し、下地法を完成してからといわれ、沈金技術の創始は享保年間(1716~36)に漆器商人が彫刻の技術を身につけた六部(巡礼者)を旅から連れて帰ったのをきっかけに、大工の五郎兵衛がそれにヒントを得て始めたとされている。その後蒔絵技法などを京都、加賀より導入し、業者も「講」(一種の同業組合)組織による得意先の不侵害などを決め、全国行商する方法で発展していった。大正13年(1924)当時の皇太子ご成婚記念に「御手箱」を献上したのを始め、現在まで漆芸の原点を指し示しながらさらに伝統を重ねており、多くの伝統工芸士が活躍されている。

11月も終わりの頃「輪島塗」を購入すべく京都より車で出発し、北陸自動車道を通り国道249号線を北上、昼頃輪島漆器会館前についた。天候が怪しくなり曇りが降ってきた。昼食をすませた後、会館の中へ入り一廻りし、価格についての知識を得た。ついで輪島塗随一の老舗「輪島屋本店」を訪れる。一階奥が漆器フロアで壁、テーブル、カウンター、ライト、食器棚、電話



塗師の家

などがすべて漆のインテリア、そこで使われる食器の盆類、カップ類、椀類、灰皿まで漆塗りで、漆器をしみじみ味わえる幸せの一時である。二階には当店制作になる各種の漆器が陳列されている。名品ぞろい漆文化の華ともいえるべきである。その中の一組「屠蘇器」(三ツ揃雪才型溜呂色紅白梅)を購入予約する。本学博物館へ美術工芸資料として展示するとともに、実習指導資料にも活用したいものである。その後当店長谷内口一博氏のご案内にて「塗師の家」を見学させていただく。塗師の家は明治43年(1910)輪島の大火後、すぐに江戸時代の塗師家の伝統をふまえて建てられたもので、相当荒廃していたが社長の英断で購入改修されたものである。「京都の町家」に匹敵すべく塗師文化の華で総漆塗の文化遺産で、町家の大きな特徴である通り庭を中心に、居住空間を前に作業場を後ろにした“人前職後”の配置は輪島の町家独特のものである。勿論水琴窟、茶室なども設けられており、風流を楽しむこともできる。一度学生を引卒し、博物館実習見学の一助にすれば見聞も広がるものと考え。

後日9年2月中旬製品の輪島塗「屠蘇器」が営業部小谷昭憲取締役より届けられた。明治時代の盛勢期の漆器に秀るともおとらない立派な出来ばえである。7月より展示、実習及び漆器の歴史研究に役立てたいと考えている。「輪島屋本店」の歴史及び塗師の家等については次号にゆずりたい。

内藤湖南の瀋陽訪書調査

松 浦 章

一
内藤湖南（虎次郎、1866～1934）は、交通不便な時代にあってしばしば中国を訪問したことは周知のことである。とりわけ、京都帝国大学文科大学教授として明治45年（1912）3～5月には、

史料採集のため奉天に出張し、富岡謙蔵、羽田亨の協力を得て『滿文老檔』『五體清文鑑』を写真撮影し、四庫全書中の珍本を鈔写す。^{※1}

とあるように、現在の中国遼寧省の省都瀋陽にある故宮を訪問して、清朝史研究に極めて重要な史料となる『滿文老檔』の写真撮影を行った。

この間の史料採取の苦勞談は、帰国後、大正元年（1912）10月に刊行された『中央公論』第283号の説苑に「奉天訪書談」として掲載され、これは『目睹書譚』に収められたことも周知のことである。

しかし、内藤湖南の瀋陽での活動状況の一端を記した記録が、当時瀋陽で刊行されていた日刊の漢文版新聞『盛京時報』^{※2}（写真①）に見える。若干の紹介を試みたい。



内藤湖南が瀋陽に到着したのは、奉天に着いたのは三月の二十三日であった^{※3}。

とある。その際の旅行記である「奉天訪書日記」では、3月22日金曜の条に、

午前八時大連発 午後三時五十分奉天着・・・瀋陽館ニ投宿^{※4}

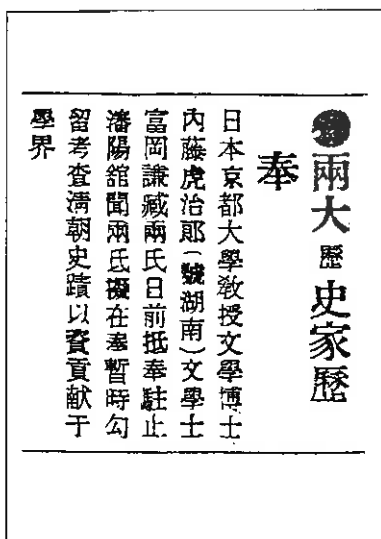
とある。

湖南が瀋陽に到着直後の『盛京時報』第1609号、明治45年3月26日（1912年）にその到着を次のように報じている。

『盛京時報』第1609号、東三省新聞 ◎奉天

●兩大歴史家歴奉

日本京都大学教授文学博士内藤虎次郎（號湖南）文学士富岡謙蔵兩氏日前抵奉駐止瀋陽館、聞兩氏擬在奉暫時勾留考查清朝史蹟以資貢獻于學界。^{※5}（写真②）



とある。内藤湖南と富岡桃華（謙蔵、1873～1918）の二人が清朝史蹟の考察のために瀋陽を訪問したことを伝えている。

瀋陽におけるその後の活動は、到着直後から積極的におこなわれた。その経過は「奉天訪書日記」に見える。

3月27日夜、日本人倶楽部において講演を行

二
「奉天訪書談」の「奉天行の目的」によれば、

っている。

富岡氏「清朝ノ絵画」余（湖南）「奉天宮殿ノ図書」^{註6}

4月3日

此日盛京報館佐藤君ニ託シテ写字生ヲ試験ス^{註7}

4月4日には、史料を筆写するためと思われる紙を購入している。

午前、静古齋ニ至リ紙ヲ買フ写書ノ料ナリ^{註8}

三

湖南の第一の目的は、『満文老檔』、『五體清文鑑』の写真撮影にあった。その他の史料は書写する必要があり、『盛京時報』新聞社に依頼したら、写字生を募集することになったのである。

「奉天訪書日記」の4月5日の条には、

此日写字生十人来ル^{註9}

さらに4月6日条に、

昨日ノ写字生来リ写書ヲ求ムル者三人、新タニ来ル者二人^{註10}

とある。写字生が募集できたのには『盛京時報』のメディアを利用したからである。それは『盛京時報』が写字生募集の広告を掲載してくれたためであった。

湖南は「奉天訪書日記」の「写字生の同盟罷工と支那人気質」において、瀋陽故宮の文瀾閣の四庫全書の一部を借り出し写字を行うため中国人を雇用している。

最初之を寫さうといふときに、どうか人はあるまいかと盛京時報の人に話すと、それは新聞に広告したら直ぐに得られる、それは此方で募集して上げて宜いと云ふことであるから、一切を盛京時報の方に任せた、で広告したところが、十人位しか要らないのに四五十人も申込んで来た。そこで試験見たやうなことをして、其中良きうなのを十人程選んだ。^{註11}

と記している。

それでは、『盛京時報』にどのような広告が掲載されたのであろうか。『盛京時報』には、この時期、湖南の仕事を補助するためと銘打っての募集広告は見られない。『盛京時報』の4月3日付け第1616号の「特別広告」に並んで「招募写字生数名」の記事があり、

一、来盛京時報試験 一、按字数給薪 一、期限約一個月（写真③）

第 一 千 六 百 一 十 二 号

招募寫字生數

一、來盛京時報試験
一、按字数給薪
一、期限約一個月

煙臺通信

とある。『盛京時報』社において写字生を募集し試験して採用し、写字数で給与を与えること、期間が一ヵ月程であることから、湖南の希望する写字生に関してであったことは明白である。さらに、翌4月4日の第1617号には、「特別広告」と並び「招募書手截止」の記事中に、

日昨由本館考驗書手、現已足額、茲將中選名字列左、均於初五日、早九点、来館面商一切。先覺 長民 吳勇 榮昌 李繼唐 胡懷民 王者玉 鳳壽臣 焉炳東 泉 永 本館白（写真④）

第 一 千 六 百 一 十 七 号

招募書手截止

日昨由本館考驗書手現已足額茲將中選名字列左均於初五日早九點來館面商一切

先覺 長民 吳勇 榮昌
李繼唐 胡懷民 王者玉
鳳壽臣 焉炳東 泉 永
本館白

來件

とある。写字生の募集による人選が決定し、決定した一〇名の名前が列記された。

『盛京時報』にはこの両日を除いて前後数日間においても同様な記事は見られないこと、しかも、「奉天訪書日記」の5日の記事「此日写字生十人来ル」とあることとも一致することから、この両日の写字生に関する記事が、湖南の仕事のために掲載された広告であることは明白である。さらに湖南の「奉天訪書日記」には写字生の名が見ず、4日の記事によってその名が判るのである。

採用された写字生の給与は千字三十銭であったが、安いと言うことで辞めてしまったのであった。^{※12}その内の一名のみが残って、他の者が加わり、五名で十三日程のあいだに予定の執筆を完了している。^{※13}筆写し終わったのは四庫全書にのみ存する『礼部志稿』をはじめとして百六七十巻冊にして六十八冊になった。^{※14}写字生の監督を行ったのは富岡氏であった。^{※15}写字生の中には毎日の給与の支給を希望した者があり、「七八十銭から一円五十銭位の額を勘定してやる」^{※16}と湖南が記していることから、一人一日当たり二千数百字から五千字を筆写したことになる。

四

羽田亨氏(1882~1955)は、湖南等に遅れること十余日で瀋陽に到着している。4月8日に「朝羽田氏来着奉天駅ニ迎フ」^{※17}とある。羽田亨氏は瀋陽滞在期間は湖南等に比べ短かったが、

帰国後に大変な仕事待ちかまえていた。湖南は「写真の方は帰つてから羽田君が毎日学校へ出て整理をして居る」^{※18}と、瀋陽での湖南が撮影した写真の整理であった。その数は「九千六百枚」^{※19}にものぼっていたからである。

今日のような便利な写真機も無い時代に、撮影する方も、原板から現像する方も大変な仕事であったと思われる。交通不便なコピー機も無い時代に困難を省みず、史料の収集に尽力した湖南等の努力には敬服せざるを得ない。

注1『内藤湖南全集』第14巻、筑摩書房、1976年7月、665頁。

注2『盛京時報』は1906年(光緒三二)9月1日に創刊され日本人が経営主であった新聞である。

注3『内藤湖南全集』第12巻、1970年6月、299頁。

注4『内藤湖南全集』第6巻、1972年11月、440~441頁。

注5『盛京時報』影印本 第22冊、盛京時報影印組輯印、瀋陽、1985年2月、[22] 178頁。

注6『内藤湖南全集』第6巻、442頁。

注7~9『内藤湖南全集』第6巻、444頁。

注10『内藤湖南全集』第6巻、445頁。

注11『内藤湖南全集』第12巻、315頁。

注12~15『内藤湖南全集』第12巻、316頁。

注16『内藤湖南全集』第12巻、317頁。

注17『内藤湖南全集』第6巻、445頁。

注18~19『内藤湖南全集』第12巻、317頁。

「祇園精舎」報告書が完成しました。

1. 体裁…B4版、上製本(縫ぎ表紙・ケース入り)、4分冊(邦文1464頁、英文179頁、写真図版308頁、附図15枚・FD2枚)、本文上質紙、写真図版アート紙
第1分冊(本文編I)

調査の経過、調査の意義と考古学的環境、基本土層序と文化的時期、遺跡各地区の調査成果など、700頁
第2分冊(本文編II)

出土遺物、自然科学的調査、地理学・文献学的調査、英文報告など、943頁

第3分冊(図版編)

遺構写真190頁・遺物写真118頁など約1400点、ダブルトーン印刷

第4分冊(附図編)

遺構平面・土層断面全体図などA全判大~A1判大
図面15枚、遺構・遺物番号表などをFD2枚に収録
2. 頒価11万円(税込)。

お問い合わせは出版部まで(06-368-0236)

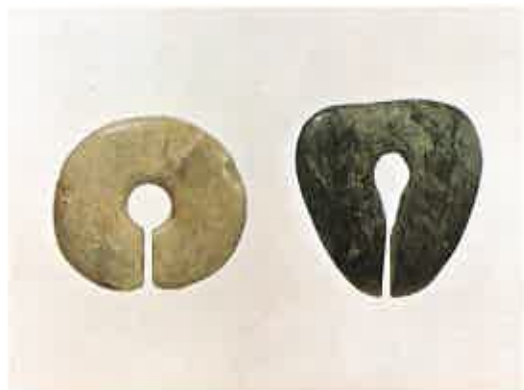


祇園精舎僧院跡の発掘調査風景

常設展示の見どころ(1)

—第 1 展 示 室—

本学博物館が平成6年4月開館して3年、多数の見学者があり、博物館活動も軌道にのってきた。博物館の定義である「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすること」を目標に、毎年度初めに計画を建て、年度末に、その成果について総括している。徐々に充実発展してきていると考える。展示活動においては第2展示室に歴史、民俗、文書および美術工芸資料を展示しています。今回はその展示資料の見方について若干解説し、参考に供したいと思います。



玦状耳飾（大阪府国府遺跡出土）

第1展示室(250㎡)を入るとすぐ右の第1展示ケースに「玦状耳飾」が上段、下段に人骨模型と縄文土器が展示されています。この資料は大阪府藤井寺市国府遺跡より出土したもので「重要文化財」に指定されています。大正6年(1917)10月3日発掘されたもので、元毎日新聞社長本山彦一氏等の調査によるものです。それまでに同類の耳飾が各地で発見されていましたが、それは何に使用したものか不明でしたが、この発掘により人骨の左右の耳部にあったことで、これが耳飾である決定的証拠となりました。また同様縄文前期の土器も同時に出土発見され、

時代も同定できたことにより重要美術品に指定され、後年「重要文化財」に指定されました。同様に第2ケースに展示している縄文・弥生時代遺物も、この国府遺跡より出土した縄文土器、弥生土器、銅鏃など「重要文化財」指定されているものもあります。

第3展示ケースに展示されている資料は「石器」資料で多数が神田孝平氏収集資料といわれるものです。石器は諸々の種類があり、石鏃、石棒、石槍、石剣、石斧、青龍刀石器、御物石器、石皿などの展示があります。第4ケースは「骨角器」が展示してあり、各地の出土です。第10ケースからは弥生時代の資料が展示してあり、銅剣、銅鐸、弥生土器、石庖丁などがあります。弥生時代は紀元前約300年より紀元後の300年までの約600年であり、稲作の技術も伝来しました。その結果定住生活を送るようになり、貧富の差が生じてきました。銅鐸2点は四条畷市より出土したもので「重要美術品」に認定されています。平型銅剣は愛媛県出土のもので、同様「重要美術品」に認定されています。第14ケースには「縄文土器」が展示されており、岡山県笠岡市津雲貝塚より発掘されたもので、乳幼児の骨が入っていました。かめ棺として使用されていたものでしょう。



御物石器（出土地不明）

第17ケース以降の左半分は古墳時代の遺物が展示されています。第17ケースには「石枕」が

展示しており、元治元年（1864）6月11日奈良県天理市渋谷から出土したといわれ、景行天皇陵出土とする伝承があります。蛇紋岩製で「石枕」としては我が国有数のもので、重要文化財に指定されています。第18ケースは石製装飾品で古墳より出土した勾玉、管玉、小玉、切子玉、棗玉、石製模造品、琴柱形石製品、石釧、石鏃、車輪石、鉄形石、石枕等が展示されています。第19ケースは鑑鏡、刀剣、刀装具類が展示しており、第20ケースも古墳出土の埴輪が展示されています。学史上でも著名な埼玉県熊谷市上中條より出土した埴輪は人物埴輪のなかでも造形的に美しく、顔の表情などはあたかも生きた人間が今にも語りかけそうで、芸術性の高いものです。第24ケースには各地の古墳出土の馬具が展示されており、中でも壺籠一双は重要美術品に指定されています。第25ケースより30ケースまでは各地古墳出土の土製品で須恵器類が主なもので、その種類として、甕、長頸壺、甗、椀形土器、平瓶、提瓶などです。最後の第31ケースには故末永雅雄先生が復原された甲冑の模型が展示されており、多くの研究者の参考資料となっています。第2展示室は歴史、民俗、外国資料及び美術工芸資料が展示されています。これらの資料解説として『博物館図録』が発刊され発売されています。開館日は月、火、木、金曜日で時間は10時より16時まで開館しています。学生の皆さんは学内散策の折にでも立ち寄り、古代の遺物へロマンをはせて下さい。



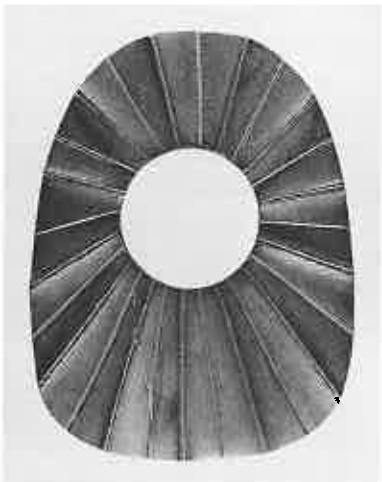
縄文土器（岡山県津雲貝塚出土）



人物埴輪（出土地不明）



銅鐸（大阪府四条畷市出土）



鉄形石（出土地不明）



第1展示室



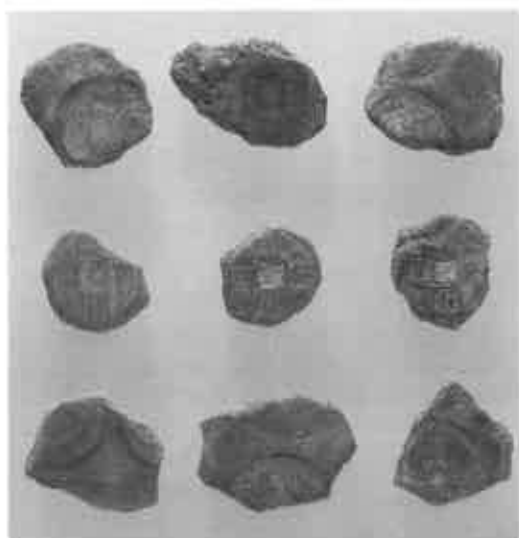
第2展示室



蔵骨器



眉庇付冑・挂甲及び装具の附装（復元）



銭范（山口県出土・重要美術品）



旧山田寺佛頭（複製）

平成9年度関西大学博物館公開講座

関西大学博物館開館三周年記念

第8回『考古学入門講座』 関西大学と考古学

開催要項

1 講	5月10日(土) 関西大学考古学研究の歩み 網干善教(関西大学教授)	7 講	10月4日(土) 高松塚古墳の発掘調査 網干善教(関西大学教授)
2 講	5月17日(土) 北玉山古墳の発掘調査 富田好久(前大阪青山短期大学教授)	8 講	10月11日(土) 飛鳥京跡と石舞台古墳周辺の調査 河上邦彦(奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長)
3 講	5月24日(土) 摂津加茂遺跡の発掘調査 玄野 彊(神戸国際大学講師)	9 講	10月18日(土) 紀伊半島の総合調査 徳田誠志(宮内庁書陵部主任研究官)
4 講	5月31日(土) 隠岐総合調査 勝部明生(龍谷大学教授)	10 講	10月25日(土) 近畿地方先史遺跡の調査 山口卓也(関西大学博物館学芸員)
5 講	6月7日(土) 岩橋千塚の調査 菅谷文則(滋賀県立大学教授)	11 講	11月1日(土) 河内長野大師山遺跡の発掘調査 藤原 学(吹田市立博物館学芸係長)
6 講	6月14日(土) 関西大学博物館企画展列品解説 網干善教(関西大学教授)	12 講	11月8日(土) 海外調査・インド国の調査 米田文孝(関西大学助教授)

編集後記

第34号をお届けします。ご執筆下さいました諸先生方に感謝申し上げます。特に山口卓也先生の『占領下日本の輸出商標』については戦後の貴重な資料として奈良新聞社の記事としても紹介されました。

4月の人事異動の内示があり、小林弥生子学芸員が総務課へ異動し、道前博学芸員が事務長補佐として配属されました。また横山直美主事も大学院事務室より博物館事務室へ配属されます。皆様のご指導よろしくお願いいたします。なお角田芳昭も定年退職しましたが、4月より定時職員として博物館業務を担

当させってもらうことになりましたので、更に一層のご指導ご協力の程お願いいたします。

平成9年度は『総合資料図録』の発行や公開講座も春秋予定されており多難な年となることと考えます。一同頑張っていきたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

表紙の写真は「埴輪」で馬形埴輪と呼ばれるもので、茨城県北相馬郡守谷町の「将門城跡」より出土したと伝えられているもので、『日本人種論変遷史』(清野謙次著)に解説があります。

【角田芳昭】

関西大学博物館叢報 No.34 平成9年3月30日 発行

関西大学博物館 編集

ナニワ印刷(株) 印刷